

「病い」と「恋愛」のディスクール

〈不可能を、(より多く) 生きる〉ために

上 西 妙 子

はじめに

本稿は、大きな主題枠としては「病むこととすこやかさ・女性学」を持つ。「身体に張りつく条件」としての「病い」と「女性」が自らについて語るとき、いったい「何ごとをなすのか」を見る、ということを執筆の動機としている。両者に共通する事態、もしくは語としては何があるだろう。「外観・兆候」、「自覚症状」、そして「想像的な全体像の模索」と「身体との問答が抱える〈ずれ〉」、また、そこに生まれる「苛立ち」、さらに、なぜか「荒々しさを秘める力」であろう。しかしながら、女性は「恋する人」一般に置き換えられて考察される。目論む成果としては、これらのテーマを、引用されるテキストが語るままについていく、ということにさせていただきたい。

1. 熱狂と切迫のディスクール

病んでいる自らの身体に向かい合って人が語るとき、そこには熱狂と切迫感がある。そのような感覚の出発点にあるもののごく卑近な例というのは、身体感覚に影響を及ぼす外的条件としての温度や湿度の計器を見るとき、軽い興奮だろう。当たり障りのない話題はまず天候であるとされるのは、そこに奥深さがあってのことである。ちょっとした癖にちかい軽い病いも、この話題に並ぶわけだ。

そして、身に張り付いたある継続的で不快な症状から「身をほどきえない戸惑い」が、まさに「病いのディスクール」となるのであるから、「(起) 源の主体」を身体と渡り合って語ろうとする試みは、熱狂と切迫感を帯びるのであり、さらには「語りきれないもの」に取り組むという、重荷をも負うことになる。

とにかく「病いの語り」において、私たちの内において自己表現する臓器とその機能は、検閲と語り続けることの認容とを「私たち」に求めながらも、過剰と不足の間で逡巡するばかりで、結局は何も確かなことは明したがない。しかし、その宙ぶらりんを望むのは、「私たち」自身なのかもしれない。それはちょうど、「手なづけえない相手」としての「寿命」についての論議が明確であることに、私たちが苛立つのに似ている。

田舎町コンブレーに住むレオニー叔母と来訪者ユーラリとの会話を、プルーストは『失われた時を求めて』の第1巻・第1部の「コンブレー」で描いている。この叔母は、どこかを病んでいたもので、次第に「コンブレーの町から、ついで庭から、さらには家から、それから部屋から、そしてついには寢床から」出なくなる。その彼女を訪ねてくるユーラリは、叔母のお気にいりの話し相手である。「ユーラリのすぐれていたのはそこである。叔母が一分間に二十度も『もうおしまいです、ユーラリさん』というと、ユーラリも二十度答えるのだ、『あなたさまのようにご自分のご病氣を知っていらっしゃれば、オクターヴ奥さま、昨日もサズランの奥さまが私におっしゃっていたように、あなたさまは百歳まで大丈夫ですよ。』『百歳まで生きることは望みませんよ』と叔母は答える。叔母にしてみれば、自分の命に、はっきり期限を切られないほうがいいのである。」¹⁾

「病いの下にある身体」の住人でありながら、その主体的な「主」ではない「病人」が味わう苦痛は、まさにパスカルが発した言葉、「おお、人間よ。なんじらの悲惨の癒しを自身のなかに求めてもむだである。」²⁾ が思い知らしめる状況である。ところがパスカルのこの言葉は、たとえ彼がその生涯のただ一日として「健康な身体」で過したことがなかったとはいえ、直接的に身体を語って

いるものではない。しかしながら、己れ自身の測りがたさへの嘆きの言葉は、心・身の両形態、そして存在というものにおいて、同じ表現形式を取りうるのだ。

「張りつき離れない現状としての病い」のディスクールは、動機とする「語る」ことにおいて対象を見据え、そこから一瞬でも身を逸らしたいという現実的な欲求」自体によって、対象にさらに強くとらわれるというジレンマにおいやられる。ところで、張りついていて分離できない「事態」に捉えられている状況というのは、他者を志向しての感情でありつつ、自分自身の「理想（可能）態」と切り離しえない「恋愛感情」が陥っている状況と同じだといえるだろう。ジャン・ヴァール（1888—1974）は「情熱」という言葉によって、この脈絡での人間のあり方を語っている。「我々を内在性の奥底にまで触れさせる種の情熱は、また我々を外部の存在とも接触させる。それゆえ人間は、この『他者』の性質について、自分が無知であるという事実のなかで、一種のめまいのようなものに捉えられるのを感じる。」

「めまい」の発する叫びとは adorable! だ、と言うのはロラン・バルトだ。バルトは『恋愛のディスクール・断章』（原題は *Fragments d'un discours amoureux* 〈恋愛状態にあるディスクールの断片〉）³⁾ において、〈恋をしている〉ディスクールの持つ特性をアルファベット順⁴⁾に並べ、各項目のもとに短文を集めている。adorable は、そこでは以下になる。「愛する人への欲望をいかんとも名づけえないままに、恋愛主体は、いささかばかげたこの語にたどりつく。素晴らしい“adorable!”」そして adorable には、こんな使い方もある。「九月のある晴れた日、わたしは買物に出かけました。その朝、パリは adorable だった…。」⁵⁾

adorable としか叫ばない主体の心のうちは、一体、どういうことになっているのだろうか？

奇妙な論理によって、恋愛主体は相手をひとつの「全体」（秋の日のパリと

同じような)として感じとる。この「全体」には何かが欠けているようにも思うのだが、それが何かを言うことはできない。恋愛主体の心に美のヴィジョンを産み出しているのは、相手の全体像なのである。(…)そこでこの全体像を、ひとつの空虚な語の形で認めるのだ。目ペリを覚悟しない限り、「すべて」を目録にすることはむづかしいからである。素晴らしい!には、具体的な美点のあれこれはなにひとつ入ってこない。ただ、全体としての情動だけがある。しかしながら、この素晴らしいは、全体を語ると同時に全体に欠けているもののことを語ってもいるのだ。(…)しかし、わたしが産み出しうるのは、ついに、あの空虚な語でしかない。⁶⁾

「覆いかぶさる条件としての病い」と「恋愛状態」、これらに向き合うディスコースは相手の「すべて」を指し示そうとするのだが、その「すべて」に焦点をあわせることはできない。たとえば、「眼が眩むほどの美しさ」という表現が表しているのは、「真に強い印象を受ける時、人は対象を見てはいない」ということである。驚嘆に捉えられた情動は、事態を「見届けること」、事態を限定することを躊躇しもする。具体的な「因」と「果」の相関としての、生み出されつつある「今の状態」の全記述、そんなことが出来てしまう「私」であることに納得することはできない。ところが、こうして足踏みすることにも苛立つ「私」は、「相手」よりも大きな「疑問符」である「私」へと、問いかけを向かわせることになる。「恋する私」へ、「死すべき私」へ、「かくある私」へと。

愛すれば愛するほどよくわかる、というのは真実ではない。恋愛行動がわたしから引き出すものは、あの人がついに識るべき対象ではないという悟りでしかない。(…)わたしは自分自身へと向かうだろう。「あなたのことを知りたいと望んでいるわたしは、いったい何を望んでいるのか。」もし、あなたのことをひとつの人格としてではなく、ひとつの力に対峙するもうひとつの力として位置づけることにしたら…そのときあの人は、わたしに

及ばず苦痛、ないしは喜びによってのみ規定されることになるであろう。⁷⁾

自らに及ぶ力の質と様相において他者を、そして自身を語る。「恋する」語りも、「病いを生きる」語りも、まさにこの形を取る。「語る主体」に到来した任務とは、「私」と一体となって「私」を変えた力を語るということであり、それは、自らの内に昂じていく「語る力」そのものを語ることである。その力は、断定と修正とを等価に持つゆえに、対立を含みながらあてどなく昂進する「自らの力」によって流されていく形でもある。

2. 「病い」の病み度

① s'abîmer（自分を痛める、思いに沈む、底なしの淵に沈む）の形

神経症の症状も一つの欲望の充足であるとされるように、この流されていく過程において、「病いとの対話」は、循環においてある酩酊状態につながる。「病膏肓に在る」という表現は容易に治らない重病となることであるが、比喩的に物事に夢中になることをさす。膏は胸の下の方、肓は胸の上の薄膜で、内臓の奥深いところであり、治りにくい部分とされる。聞き慣れた「恋しい」という言葉にしても、「囚われの状態」としての「病い＝夢中」のメタファーを、私たちは妥当なものと納得して用いている。

「囚われの状態に留まることは怖れつつも、耽溺することへの誘い」を知る状態を考えると、「仮病」という言葉が浮かぶ。モンテーニュは「仮病を使ってはならぬこと」⁸⁾において、方便のために仮病を使った人が「とうとう運命が親切にも彼を本当の痛風病みにしてくれた」例を語り、「癖や振りが本物」とになると警告している。それは彼が言う「われわれの精神の能力の大部分は、われわれの使い方がそうであるように、生活の不安に役立つよりもこれを乱すものである」という言い方で説明されるのだが、「仮病」、そして「振りをする」ことが持つ仮装された「乱れ」への誘惑とは、一体何だろうか。すなわち、身は「囚」から自由であるという確信のうちにおいて、仮の「果」に自己の表現を託しな

がらも、その責任ある主体であると自らをみなすことなく過剰を享受することが、なぜ人を誘惑し解放感を与えるのだろうか。それは、不可分の心身という器を、「因」と「果」の分離において構成するという誘惑が、そこにおいて果たされているということではないだろうか。

「思い込み」が「現実化機能」を持つということは、精神の能力は、「身体の慣れ」にどの程度抵抗できるかにかかっているということなのか。林達夫は、自由を愛する精神が反語的精神によって欲することと正反対のことをし、敵対者の演技を演じるという必然を擁護するのだが、その危険性として、いつしか、どっちが本物であるか分からなくなってしまうと指摘する。⁹⁾「振りが本物」になるのだ。この反語的精神というものが二重性を操り、他者を欺くと自認する優越心であるというのに、いつしか自発的でもあれば意志的でもある「抛り所」を失いかねないように、「因」と「果」の分離、もしくはバランスのある相関の見極めという操作は、生身の人間にとっては至難の技だということだろう。

恋愛の脈絡において、この「因果の分離」という技が要請されながらもうまくいかないのが、「片思い」である。残念ながら、恋愛感情は相互的でない場合には、実に不吉なものになる。その不吉さであるが、ちょうど仮病が具体的な効能（口実、方便）である以上に、甚大な被害を使い手に与えることの理解を確認するためにも、ここで、「循環しない思い」という「因果の不全」である「片思い」が、苦い陶酔をもって渦のなかに身を投じて発する言葉を、聞いてみることにしよう。再びバルトである。

とりつかれたように、「なぜ私は愛されないのか？」と自問すると同時に、恋する人は、実際は相手は自分を愛しているが、それを言わないのだという確信のうちに生きている。愛が完全なものにしているこの「私」を、なぜ愛されずにいられるというのか？ 私は愛されていないということに、苦しんでいると思っていた。しかし苦しんだのは、愛されていると信じていたからだった。私は、愛されていると同時に見捨てられていると信じる、

という複雑さの中で生きていたのだ。私の内面の言葉を聞く人がいたら、
気難しい子供に言うように、こう叫ばずにはいられないだろう。「いった
い、どうして欲しいというんだろう？」¹⁰⁾

当人にもはた目にも不可解なこの乱れようの基底に指摘できるのは、恋愛
(もしくは自己愛)が、当然のこととして(なぜなら、見果てぬ自我の拡大を求
めるのがその責務であるのだから)規範・基準を失う時の、自己破滅的な動き
である。バルトの『恋愛のディスクール』が最初に取り上げる単語は
〈s'abimer〉であり、その定義は、「恋愛主体が、絶望、あるいは歓喜のせいで襲
われる心神阻喪の発作」¹¹⁾となっている。ここで等価として扱われている「絶
望・歓喜」の中で、〈s'abimer〉にひたる「恋愛のディスクール」を見てみるこ
とにしよう。

傷心、あるいは歓喜のあまりに、底なしの淵へと沈みたくることがまま
ある。(…)底なしの淵に沈むとは、しばし催眠術にかかっているようなも
のだ。かけられた暗示が働き、おのが身を殺すことなく消滅せよと命じる
のだ。(…)そのようにして底知れぬおもいの淵に沈むのは、この身を置く
べきところがもうどこにもないからだ。死の中にすらないのだ。¹²⁾

この文章が語る「消滅」や「死」が、「死」に向かって実際に身を投げ出す行
為と現実的な脈絡においてつながるとすることは、できないだろう。「おのが身
を殺すことなく消滅せよ」との命令が持つ甘美さを人が感じるとしたら、それ
は、無意味の充実ともいえるような感覚においてなのだ。バルトの表現では、
「それは、死を免れた死なのだ。(…)思考されようのない論理にしたがって死
を思い、死と生を対立せしめつつ結ぶあの宿命的結合の外へと漂流するの
だ」¹³⁾となる。このレトリックとしての表現と、それが言いあてている人間的
な真実の間を埋めるのは、まさに本稿の2テーマである「病い」と「恋愛」の

さまざまのディスクールが、人の身体において生きられる「こと」でしかないだろう。

②過度の充実を生きる

その一方、「因」と「果」の連結に対して、意味の充実を過度ともいえるような形で受けることによって、「病い」に向き合う態度がある。そのとき人は、別の空の支配下になんじがらめになったことを思う。そこでは、一種のメロドラマが圧倒的な説得力を持つのであり、このことについては後に考えることになるが、まず、このメロドラマにおいて機能する「隠喩」を「病い」との関連において論じている書物について述べることにしよう。

『隠喩としての病い』¹⁴⁾においてスーザン・ソントグは、致死の病いが持つ神秘性が招く隠喩の暴虐を訴えた。かつて、ペスト、チフス、コレラといった大きな流行病においては、各人はその災禍に見舞われた社会の一員として、病気にかかることとされた。そして結核は、病いを個人のものとした。結核においては現実の苦痛はもっぱら抑圧され、苦痛のロマン化、いわゆるロマン派的な死の扱いがなされ、その結果、病気は個人に関わるものとされたのであり、死に直面したときにこそ自己をより意識するという観念が、病人を「興味深い、つまりロマンティック」な対象にしたとソントグは言う。¹⁵⁾

バルトは、歴史的なこの脈絡における「主体」のロマン主義以降の在り方を、「『主体』とは、苦しむ者」であり、「傷のあるところに主体がある」として続けて言う。「傷とはおそろしいまでの内密さをそなえたものである。恋愛の傷とはそうしたもののなだ。それは根源的な（存在の『根』における）開口部であり、ついに閉ざされることがない。主体はこの開口部から流れだし、その流出を通じてこそ主体となる。」¹⁶⁾

そして現代において、いまだ原因の特定がなされない「癌」は、致死の病いとしての不気味さが隠喩を招く。さらに、癌にかかるのは「感情・情念の抑圧が原因」であるとする心因性の考え方は、癌にかかりやすい性格類型を断定し、

そこに「根源的な」、「絶対の」悪を解説しようとして隠喩を探し求める。多因性である事態は単純化という暴力を受け、安易な「病気懲罰説」ともあいまって、いたるべき死が癌患者にとっては侮蔑以外のなにものでもないように捉えられることを、ソントグは嘆く。¹⁷⁾「心理学的な理解は、病気の『現実性』を骨抜きにしてしまう。しかしその現実性こそ、説明されねばならない。」¹⁸⁾これが彼女の「病んだ身」を抱えての基本的な、ゆえに積極的な姿勢であり、それゆえに「最も健康に病気になる」ということは、隠喩がらみの病気観を一掃し、力をこめてそれに抵抗することとなるのだ。¹⁹⁾

「健康な人間」の「安泰」も、実際は人には先が見えないからに過ぎない。それゆえ、「病い」の因果の全体的な一貫性を自らのうちに見る眼とは、「他よりも明晰である」ということでしかないのだが、それが持つ形の一つは、個性や宿命という観念を結びつけて自らのメロドラマを仕立てあげ、それを「死にうる・死なざるをえない理由」ともするということである。

メロドラマとは、ステレオタイプの極を、私の身において生きる「宿命の感覚」である。そこでは隙間のない事の継起が、個の身体には極めて疎遠なものであると感じられながらも、圧倒する形において人を魅了する。さらにそこには、自分にも他者にも向けられるある種の熱中でありながら、同時に極度の冷静、冷酷でもあるものがある。熱中と冷酷が合体する苦さは、そこで発せられる言葉に軽薄で致命的な遊戯をさせもする。それを、^{うけ}受をねらった悲壮なヒロイズムと呼んでおこう。

「悲壮なヒロイズム」とは、歪みを含んだ明晰の使用法、つまり屈しながら手玉に取るという芸当をするディスクールである。決定的という意味での致命的という形容詞は、「生命」に達する力を持つものを指すのだが、その場合、vital, fatal の2語が当てられる。前者が命を養うのに不可欠なものをさすのに対して、後者は命の終決に直接に影響するものをさす。“Femme fatale”「運命・宿命の女」とは、一般には「男性を破滅させずにはおかぬ女性」という意味で使われるが、その一人とされるカルメンは、ついに会った相愛の男性、闘牛

士のエスカミリオに向かって、以下のように歌う。

Ah, je t'aime Escamillio, je t'aime et que je meure
si j'ai jamais aimé quelqu'un autant que toi
あゝ、好きよエスカミリオ、好きだわ、いままで、
誰かをあなたほど好きになっていたのなら、死んでやりたいわ²⁰⁾

同様の表現（死んでやりたい *que je meure*）は、19世紀末の詩人ヴェルレーヌ（1844-96）の詩にも見られる。ヴェルレーヌは、純潔と汚れ、罪と懺悔の間の分裂を日々のこととして生き、「追われた豚のごとく転々と放浪した」詩人であるが、「自己克己の無能力を、力強く示す」ことに優れていた。彼は、陽気な悲哀を演じる *galant* なピエロに類する人物に、詩のなかで語らせている。〈*galant*〉とは、形容詞としては「[男性が] 女性の気を引こうとする、色恋の、艶美な、粋な」という意味であるが、感覚としては「18世紀フランス、ロココ時代の軽快で優雅なスタイルに、吟味や観察を加えるまでもなく感応してしまう感性」といえるのではないか。日本には見つけがたいものと筆者は考えている。そこで、ヴェルレーヌである。

- 胸の炎は……ド、ミ、ソル、ラ、シ。（…）
- 星一つ 外して進上出来ぬなら、奥様がた、
いっそ わたしは死にまする。〈*Que je meure, mesdames*〉²¹⁾

この「ヤクザな」物言いはカルメンのものでもあるが、日本の歌謡曲の「アカシアの雨に打たれて、このまま死んでしまいたい」という独白とは意図を異にしている。前2者には観客が要るのであり、カルメンもピエロも、「恋の病いの真性の狂おしさを生きる自分」を認めないというのなら、彼らの前で「*que je meure*」（われ、死なんことを、または、死んでみせてやりたい）と言ってい

なのだ。カルメンにとっては、自らの生の充実^{かけ}は賭での負け、死を介したものである。femme fatale は相手を死に誘う女ではない。自身も観客となって、自らの命の過剰のあまりに自らの死を見届けたい、見届けさせたいという女なのだ。

3. 疲労を越えて

見つめ続けることができるものとは、見極めつくせないものである。それゆえ、過剰であるものに向かい合うという果てのない試みにおいて、「語り」が陥る一つのディスクールの形がある。

素晴らしいとは、ひとつの疲労、言語活動の疲労が残した無益な痕跡である。わたしは、語から語へと自分の「イメージ」の同一性を言いかえてゆくことに疲れ、自分の欲望の的確さを不的確にしか表現できぬことに疲れ果てるのだ。(…) 幻惑を記述するとは、とどのつまりが、「わたしは幻惑されている」という言表を越えることのありえぬものだからだ。言語活動の果てにいたれば、言語はその最後の語を、まるで傷ついたレコードのようになりかえすほかない。²²⁾

「恋」がスポーツ的であるよりは、むしろ熱気が裏打ちする衰弱感であるのはこのためだ。「傷ついたレコード」の示すイメージは、「あったこと」、「ありえたこと」への感傷を含んでいる。センチメンタル・ジャーニーも、こうしてある完結を示す。さらに、バルトの文章の明察は慰めを与えてくれもする。

一方で、生命に対抗してくる過剰な否定に向かい合う試みとしての「病む身体に向かい合うディスクール」は、この疲労を越えて言葉を紡がねばならない。

16世紀フランスのモンテーニュは、「人間は誰でも自分の中に人間の性状の完全な形をそなえている」²³⁾ という認識をもって、「モラリスト＝人間性考察者」の書『エッセー』を残した。モンテーニュは、「私は、おいしそうで食欲をそ

そのものならば、名前や色にはこだわらない。快適ということは利益の最も重大な要素の一つである」と満足して記したような、「高く強い声を持った」享楽に適した体力の持ち主であったが、腎臓結石の持病を持っていた。その痛みを、彼はこんなふうに描く。

おまえは皆の前であぶら汗を流し、青くなり、赤くなり、震え、血まで吐き、奇妙な痙攣に苦しみ、ときには目から大粒の涙をこぼし、濃く黒い色の恐ろしい小便を出し、あるいは、とがって逆立った結石で小便をせき止められ、陰茎に刺すようなかきむしるようなひどい痛みを感じながら、それでも一座の人々と普通の顔つきで談笑し、ときどき召使たちと冗談を言い、真面目な話の仲間入りをし、口でおまえの苦痛を弁護し、苦痛を割引して見せる。²⁴⁾

しかしこれとても、事態の列举に配慮したうえでの、抑えの効いた喚きであるとも言える。そこで思い出すのがルソーのモンテーニュ批判である。「私はいつもモンテーニュのいつわりの無邪気を笑ってきた。彼は自分の欠点を白状するふりをしながら、ただ好ましい欠点しかひっかぶらぬよう細心の注意をはらっている。」²⁵⁾ しかし、語り尽くせない「痛み」の暴虐を語るに当たり、相手に発言権を譲り続けるのは危険な策だろう。このルソーも言っている。「わたしが言わなければならないことのためには、わたしの企て（注：ただしこれは、自らの生の語りとしての『告白』の執筆をさす）と同時に新しい一つの言語を発明しなければならない。わたしがたえずゆさぶられていたあのように雑多で、あのように矛盾し、多くの場合あのように卑しく、また時としてあのように崇高な感情の、この巨大な混沌を解明するためには、どのような語調、どのような文体をとるべきであろうか。」恋人に会えるという興奮のために、道中転び続けながら通いつめ、あげくの果てに脱腸になったルソーにしても、けっして頑健な身体を持ち主ではなかったし、また彼は、特異な身体体験を語る人で

もあった。しかし彼は、モンテーニュほどには身体の健康度には注意を払わなかった。そこでモンテーニュに、彼の考える「対病い」のディスクールの可能性を聞いてみよう。

哲学は思い切って病気に対して、声を出してわめく懦弱を許すがよい。その懦弱が心からの、胸の底からのものでさえなければよいのである。自らあげる泣き声も、自然がわれわれの手の届かないところにおいた溜息や、すすり泣きや、動悸や顔面蒼白と同種のものだと思えばよい。心が恐怖せず、言葉が絶望におちいりさえしなければ、〔哲学〕はそれで満足すべきである。²⁶⁾

これは、全面的に「病い」に応じて操られながらも、「病いのディスクール」が持つ親密な声の多様さを、感じ、聞き分ける態度といえるだろう。思いの限り嘆き悲しむのはいいことに違いない。「思わず」、「ふと」洩らしてしまった嘆きが自らにおいて慰めを得るのは、その自らの声との距離を知りつつ、こうして自身に向き合おうとする態度は、圧倒してくる力が自らに誇る、全方位からのその攻撃を逸らすことを、すでに知っているはずのものなのだから。

4. 「病いの語り」の自己鍛練

一つの報いは、ひたすらに語る「病いのディスクール」が導いていく、ある開放された空間である。身体の苦痛を、あまりに個人的なものだと理解し、それはただ一人で耐えるべきだと了解していた意識が、思わず叫び始めるときのその奇妙な感覚を、『エッセー』のモンテーニュは以下のように語る。「まったくおかしい考え方ではないか。誰にも言いたくないいろんな事柄を、世間の人々に向かって語り、また、私のもっとも秘密にしておく知識や思想については、親友たちをも本屋の店先へ追い返すとは。」²⁷⁾

有用な知識という点に限って言えば、この驚嘆の裏にあるのは、2つのくい

違う事実である。一つは、「知識欲ほど自然な欲望はない」²⁸⁾とモンテーニュが「経験について」の章で言う単純な事実であり、また、どのような2人の病人も、正確に同じように病むのではなく、限界のない多様性に面して、確実性を見せる経験の認識はありえないという事実である。

ところでモンテーニュの父親も同様（膀胱結石）の病いに苦しんだのであり、息子は自身の苦痛の中で、彼としては「遺伝」であると理解したこの事態が彼に髣髴とさせるさまざまな思いに驚嘆している。人間という形式は、限界のない個体化を可能としている。しかし病いにあって、人は「夢見ること」を難しいと思うにしても、ある「遙かな視点（共感）」を持ちうるのだ。

そして、「身を超えて知る」という冷静な知恵である。ブルーストは「病いの慈悲」を、「死を越えた現実到我々を近づけること」とし、「本物の苦しみの中に冷静さを得る」には、「近づく死を自らの内に持ち、ボードレールのように失語症に脅かされねばならないのだらう」²⁹⁾と語る。この「思い」は、「いままでは、死と完全に仲直りをし親しく交わることができずにいたが、疝痛がそれをなし遂げてくれそうだ」³⁰⁾と言うモンテーニュのものでもある。

ブルーストは、「待つ」という感覚について、次のように語っている。

いかなる羅針盤もなく、いかなる方向もないというのが待つということの特徴であり、この何も持たないという感覚は待っていた人が来たあとも続き、私たちの内で、そのおかげでその到来を大きな喜びとして心に描いていた静けさに取って代ってしまい、そこに喜びをすこしも味わわせてくれない。³¹⁾

ブルーストの描く「人間の経験」は、微妙で微細な時空での展開を見せるものだが、ここでも、「現実的な時間において生きること」と、「心理的に生きること」の〈ずれ〉を含む重なりが指摘される。そして究極、私たちが待つものとは「死」であり、「病い」がその招き手であるのなら、「病い」、「死」を、そ

して「与えられた今」を生きるべきディスクールとは、無方向への信頼を託した全開の視点とでもいうものなのだろう。

5. 「因」と「果」

病人が主人公に置かれた小説がある。日本文学において、そこにあるべき繊細さが描かれていると評価されていると思える一冊に、堀辰雄の『風立ちぬ』がある。語り手（男性）は、結核を患う婚約者を八ヶ岳山麓のサナトリウムに伴っていく。以下は、二人の会話である。

「私なんかのことばかり考えないで…」

「いや、お前のことをもっともっと考えたいんだ…」私はそのとき咄嗟に頭に浮んできた或る小説の漠としたイデエをすぐその場で追い廻し出しながら、独り言のように言い続けた。「おれはお前のことを小説に書こうと思うのだよ。それより他のことは今のおれには考えられそうもないのだ。(…)」

「分かるわ」彼女は自分自身の考えでも逐うかのように私の考えを逐っていたらしく、それにすぐ応じた。が、それから口をすこし歪めるように笑いながら、

「私のことならどうでもお好きなようにお書きなさいな」と私を軽く遇うように言い足した。

私はしかし、その言葉を率直に受取った。

「ああ、それはおれの好きなように書くともさ。…が、今度の奴はお前にもたと助力して貰わねばならないのだよ」

「私にも出来ることなの？」

「ああ、お前にはね、おれの仕事の間、頭から足のさきまで幸福になって貰いたいんだ。そうでないと…」

ひとりでぼんやりと考え事をしているのよりも、こうやって二人で一緒に考えあっているみたいの方が、余計自分の頭が活発に働くのを異様に感

じながら、私はあとからあとからと湧いてくる思想に押されでもするかのように、病室の中をいつか往ったり来たりし出していた。

「あんまり病人の側にばかりいるから、元気がなくなるのよ。…すこしは散歩でもしていращゃらない？」

「うん、おれも仕事をするとなりあ」と私は目を赫かせながら、元気よく答えた。「うんと散歩もするよ」³²⁾

ここだけを読んで笑ってしまっただけでは作者に気の毒ではあるが、語り手は「生命（もしくは死）の作品への昇華」を元氣一杯に説いているのに、「彼女」は彼のように共同作業の潤滑な因果を信じてはいない。というよりは、彼の（装ったふうでいて、実はそうでしかなかった）率直さに当惑している。「一緒に考えあっているみたい」と思う彼には、散歩に出ていってもら方がいい。目的としてではなく、手段（素材）として語りかけられる彼女に答えがあるはずもなく、³³⁾ 彼（作者と同一視できる）は、自身を認知する行動の全容には意識的であるが、「相手（の生命）」に現実的に配慮する術のない虚しさに意識的であることから逃げている。

問題は、意識的になりうるか否かではなく、方法自体にある。この方法の無理に対してプルーストが導入する視点は、「因果の整合性」、つまり「原因から結果」への叙述という、当然とされる流れを乱すことである。彼はセヴィニエ夫人とドストイェフスキーの描写法が似かよおうとするのだが、それは彼らが、「事物を論理的に描写しないこと、事件の原因から結果へと描写しないこと」にあるとする。「特権の瞬間」と呼ばれる、プルーストの描く「過去の突発的なよみがえり」も「心の間歇性」も、明瞭な連続性に支えられ続けた因果性を疑問に付して、そこに亀裂を呼び入れる事実であるが、それは圧倒的な現実感に満ちる経験として描かれる。忘却に磨かれなかった記憶は、「時」を知ってはいないということだ。こういったプルーストの一般的な方法は、先に引用した堀辰雄の小文脈にそのまま適用するにはサイズ違いという印象も持つのだが、他者

との関わりを内省する契機を見る視点において、通いあうとしたい。

「スワンの恋」は、プルーストの『失われた時を求めて』の第1巻・第2部であり、嫉妬に苦しむスワンの粒子状ともなった心の動きの諸相が、観点の（しかも恋愛観の）移動や逆転、ニュアンスを変えての反復において描かれる。その心の力学・化学作用とは、部分でもあれば総体でもあり、「因」でもあれば「果」でもある「心の諸単位」の、実に多様な運動性といえる。スワンはオデットに恋し、彼女の不可解な行動がかきたてる嫉妬にも苦しんでいる。この「恋」の叙述は、まさに「全体的！」といえるだろう。

確かに、この恋の病いの範囲について、スワンにはじかの意識 (conscience directe) がなかった。彼は恋を測量しようとする。すると、時にはそれは減ってゆき、ほとんど皆無にまでなると思われた。たとえば、彼女を愛するようになるまえに、その表情たっぷりの顔立や冴えない顔色からうけたわずかばかりの好感、ほとんど嫌悪感が、数日間また戻ってくることもある。(…) 彼の眼が卓上のオデットの写真に出あうとき、または彼女が訪ねてくるとき、彼は現身^{うつしみ}の、または写真の彼女の姿と、自分のなかに存在しつづけている苦しい不断の悩みとを同じ性質のものとは思いかねるのだ。そこでほとんど驚嘆して自分に問う、「これが彼女なのか！」と。あたかも突然眼のまえに、抱え込んでいるいくつかの病いの中から一つを身の外に取り出して見せられても、とても自分の苦しんでいるものに似ているとは思えないように。「あれ(彼女=病い)とは」と、彼は自分に問いかける。というのはそれは、漠然とした病気のあれこれというよりも、恋とか死^{にすぎた}の似姿、すなわち、それ(二重性としての「あれ(彼女=病い)」)の現実感をつかめないのではないかという恐れから、個性という神秘を私たちにより深く突きつめさせると人が言うところの、あの似姿なのである。そしてこのスワンの恋という病いは、あまりに多様になっており、彼のあらゆる習慣、あらゆる行動、その想念、健康、眠り、生命、そして、彼が

死後に望むことにすら緊密に混ざりこんでおり、彼ともう一体でしかなかったので、ほとんど彼を徹底的に破壊しないかぎりには、この恋という病いを彼からひき離せそうもなかった。

《C'est elle》, comme si tout d'un coup on nous montrait extériorisée devant nous une de nos maladies et que nous ne la trouvions pas ressemblante à ce que nous souffrons. 《Elle》, il essayait de se demander ce que c'était; car c'est une ressemblance de l'amour et de la mort, plutôt que celles, si vagues, que l'on redit toujours, de nous faire interroger plus avant, dans la peur que sa réalité se dérobe, le mystère de la personnalité. Et cette maladie qu'était l'amour de Swann avait tellement multiplié (...) ³⁴⁾

ここに描かれるのは、「彼の内で生きる彼女を、病いとして生きる彼スワン」、すなわちスワンにおける「恋という病い」であり、下線をほどこした単語は、その事態を言いかえたものである。そこには、オデット（他者）が他者（オデット）であることと同等の不可解として、スワンが「自分」であるために、彼女との関わりにおいて「かく病んでいるスワン」となっている事態の多様な相貌が描かれている。「病いのあれこれ」とは「生」の数々である。それらの病いは、きわだって「恋」であり、そして「死」であるのだ。相手を名指したゆえに陥った「恋の病い」が言い続ける言葉は、「私が実在するのは、私のことを夢にみる一人の人間が存在するからです」であり、また、「病んでいる私は、あなたではなく私という名前です」ということなのである。

訳文が異様となったのは、代名詞（elle）に二重性を持たせなければ、読解が成立しなかったからである。「一つの事態」を語りつつ、巧妙に言いかえられていく主題が反映するのは、「事態」の多層性であり、文法構造のはらむ〈ずれ〉は、人の心が生きているはずの〈ずれ〉そのものである。「なぜ、こんなふうに私はなってしまったのだろうか？」と、どんな人でも、一度は真剣に自問したで

あろう不可解な囚われの状態の因果とは、こういうことではないか。

この文章の仕掛けは多様である。事態に対する「じかの意識の欠如」が文頭で言われるが、これに通う表現を、一種の「煙幕仕立ての挑戦」として掲げて、その後に、読者を魅惑し続ける難解さを展開するブルーストの文章を、いくつもあげることができる。それらは、流通する文法を破壊しもすれば、読者に明確な解釈を、ついには放棄させもする。

人は、自らの「心の動き」に驚愕することがあるはずである。心が心でありすぎる果てに、身体の疲労が招く兆候に似た「倦怠」が、「弛緩」が、「沈鬱」が、「過剰」が、「無感覚」が、「怠惰」が、「的外れの利己心」が現われる。ブルーストが描く恋するスワンの嫉妬の悩みは強かったにしても、そして確かに、「実際のところ、当時、はっきりとは自分で認めなかったにしても、しばしば死にたいと思ったものだが、それは、苦しみの激しさから逃れたいというよりも、必要な努力の単調さから逃れたかったのだ」³⁵⁾とブルーストはする。ここでは感情の意味と価値は転倒されており、それでもスワンの身体は心とともに生き続ける。読者は、期待したように「ロマンティック」でも、同情すべき「誠実な情熱家」でもないのに、「死にたいと思うほどの恋をする人間」の「粒子状の心理」を見る。以下は、そういうスワンが、第1巻・第2部の「スワンの恋」の最終部で聞かせてくれる詠嘆である。

人生の数年を無駄にしたなんて、死にたいと思ったなんて、自分の気にも
入らず、好みのタイプですらない女に対して、私の最大の恋をしたなん
て！

Dire que j'ai gâché des années de ma vie, que j'ai voulu mourir, que j'ai eu mon plus grand amour, pour une femme qui ne me plaisait pas, qui n'était pas mon genre!³⁶⁾

彼は我ながら呆れたというにしても、確かに「生きたこと」を感じている。

この叫びのあと、『失われた時を求めて』はすぐに第3部「土地の名：名」に移る。ところで、こうして悟ったはずのスワンは、この悟りをもって終わる「スワンの恋」に先立つ第1部ですでに、「そんなオデット」の夫として描かれていたのであり、作品を始めから読み続けてきた読者には、「この詠嘆」が「実践的な総括」でないことは分っている。彼の結婚前後の事情は、小説中には一切描かれな^い。スワンのこの詠嘆は、スワンの生きた「(最大の恋の) 事実」が、分割(下線部)されながらも一つの事態であるところの人間の事件を描いている。羅針盤を持たず、「その時々」を生き続ける人間の事件である。

この羅針盤のない状態を、「病む身」において考えたい。こういった「病いにある姿勢」として浮かぶイメージは、自身の病いの在り方をしらずに、病いに伏す子供である。彼らはありうるエネルギーはその場で消費し、治癒へため込むことはない。憶測もしない。子供は不如意な状態に屈してはいるが、大人は「病である」という観念に打ちひしがれうる。子供は「果」を生き、大人は「因」を生きている。

外から到来するようでもあれば内において生み出される苦痛は、それを見極める感受と、そのメッセージを受け取る理解と、それに対応する意志を巻き込む。この3者の絡りあいにおいて、「反語的精神」が持ちうる危うさには少し触れた。ユーモア、とくにブラック・ユーモアなるものには触れなかった。それも一つの手には違いない。それにしても、まわりの全てを疑うことを楽しむための基盤として、なんらかの確実さをどこかに見いだす必要があるというのは事実だろう。

モンテーニュは、「われわれも、われわれの判断力も、またすべての死すべきものも、たえず流れ、動いていく。それだから、ひき続くどのものの上にも確実なものを据えることはできない。判断するものも判断されるものも、ともに変化と変動のなかにあるからだ」³⁷⁾ というのだが、その一方で、こうも言う。「あたまのなかに全体の形を持っていない者にとっては、一片一片をならべあ

わせることができない。」³⁸⁾「病いのディスクール」、「恋愛のディスクール」を紡ぐ合間に介在すべき沈黙の時、その時、(ある全体の形としての)人間として、一片一片の自分の思いを手にとって見つめながら、並べてみたいではないか。一片一片、置き換えられるたびに見られる異なる心の相貌と、対話を交わしてみたいではないか。並列、倒置、重複、裏表、分断、亀裂…。そんなふうには置かれる紙片のあり方は、まさに表現様態に関わる文法事項である。

その合間において私たちに託される仕事とは、「病いのディスクール」の文法構築であり、その基本概念は、「因」を患わず、「果」を〈生き生きと〉生きるように、「因」と「果」を生成の中にある「全体の形」に投げこんで、そこから断片を取り出しては時には重ねあわせつつ、並べかえ続けることでしかないだろう。

「性別」との渡り合いかたも、「因」を患うことなく、「果」を生きることだろうが、性別において生きるべき「果」とは、「自分らしさ」と「女(男)らしさ」という自己像を、病いの「果」を生きる「子供」のメタ思考の欠如とは対蹠的な方法、視点で見ることだろう。子供と大人(『私』に発するディスクールを生きる存在)と「むしろ『他』に発するディスクールを生きる存在)は、それぞれの力である「自覚症状」と「想像的な全体像の模索」に応じて、「今」・「ここ」に生きるという、同じ事を果たすことになる。

この小論に付したタイトルの意味に一言付け加えたい。「見果てぬ患部」に向かって生きる「病い」と「恋愛」のディスクールに対して、抱え込んでいるその「不可能」を、質において「よりよく」生きてほしいと望むのではない。むしろ量において「より沢山」生きようであって欲しいと望んだゆえに、奇妙な副詞「より多く」を付したのである。

注

- 1) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1987, I, p. 69. [abréviation : RTP, I]

- 2) パスカル『パンセ』, Pascal, *Pensées*, texte établi par L. Brunschvicg, Flammarion, 1976, p. 168.
- 3) ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』、みすず書房、三好郁朗訳、1980、pp. 31-2。
- 4) s'abîmer, absence, adorable…tel, tendresse, union, vérité, vouloir-saisir…（底なしの淵に沈む、不在、素晴らしい…あるがまま、やさしさ、合体、真実、占有願望…）
- 5) 同書、p. 3。
- 6) 同書、pp. 31-2。
- 7) 同書、pp. 204-5。
- 8) 『モンテーニュ II』、世界古典文学全集、原二郎訳、筑摩書房、1968、第2巻・第25章、p. 64。
- 9) 林達夫『歴史の暮方』、筑摩書房、1968、pp. 79-80。
- 10) 『恋愛のディスクール・断章』、p.280。
- 11) 同書、p. 17。
- 12) 同書、pp. 18-9。
- 13) 同書、p. 20。
- 14) スーザン・ソントグ『隠喩としての病い』、みすず書房、1992。
- 15) 同書、pp. 45-6。
- 16) 『恋愛のディスクール・断章』、p. 84。
- 17) 前掲書、p. 72、p. 84。
- 18) 同書、p. 84。
- 19) 同書、p. 6。
- 20) *Carmen*, Henri Meilhac et Ludovic Halévy d'après la nouvelle de P. Mérimée.
- 21) 『ヴェルレーヌ詩集』、鈴木信太郎訳、岩波文庫、1952、pp.40-41。
- 22) 『恋愛のディスクール・断章』、p. 34。
- 23) 『モンテーニュ II』、第3巻・第2章、p. 148。
- 24) 同書、第3巻・第13章、p. 371。
- 25) ルソー『告白』、世界古典文学全集 49、桑原武夫訳、1996、筑摩書房、pp. 327-8。
- 26) 『モンテーニュ II』、第2巻・第37章、p. 115。
- 27) 同書、第3巻・第9章、p. 285。
- 28) 同書、第3巻・第13章、p. 349。
- 29) Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1971, p. 621.
- 30) 『モンテーニュ II』、第2巻・第37章、p. 115。

31) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1988, III. 135.

32) 堀辰雄『風立ちぬ』、新潮文庫、1951、pp. 123-4。

33) ここで参照したいのが、アンドレ・ブルトンの『ナジャ』(1928)、栗田勇訳、現代思潮社、である。この書は、詩人・精神科医ブルトンの、精神を病む少女ナジャ（ナジャとは、ロシア語で希望という言葉の始まりの部分だからいいのだと彼女は言う）とのパリでの実体験としての出会いから、ランデヴーでの会話の記録、そして、彼女が隔離された後のナジャへの呼び掛け、ブルトンの独白から成る。

「ぼくは誰だ？ 諺のいうところを信じれば、結局ぼくが誰と〈つきあっている〉かを知りさえすればよいということになるのだろうか？（…）このことばは、（…）生きながらぼくに幽霊の役を演じさす。明らかにこのことばは、誰かであるためにぼくがそうあることをやめなくてはならなかったもの、それを暗示しているのだ。」

Qui suis-je? は、「ぼくは誰だ？」と同時に、「ぼくは誰のあとを追うのか（つきまとうのか）？」を意味する。つまり、「自分自身を問うことの真面目」、「他者に魅せられることの真面目」は、「幽霊となる」ことにつながるというのだ。だが、病んだナジャは「あの世」に行き、両者は互いを見失って本当に幽霊となったのか。ブルトンの呼びかけは痛々しい。

「そこにいるのは誰だ？ ナジャ、きみなのか？ あの世が、あの世のすべてが、この世のなかにあるというのは本当かい？ きみの言うことが、ぼくには聞こえない。そこにいるのは誰だ？ ぼくだけしかないのか？ ぼく自身なのか？ お前は？」

「きみがぼくにとって謎だというのではない。ぼくがいうのは、きみがぼくを永遠に謎から遠ざけてしまうということだ。自分だけが存在できるかのようにしてきみが存在しているからには、この本が存在することもそれほど必要なことではなかったのかもしれない。」

この書の最後は、以下のように結ばれ、謎にかすかに触れる瞬間をとらえる。「美とは痙攣的なものであり、さもなくば存在すまい。」

34) RTP, I, 303. フランス語のテキストは、特に問題のある部分のみを引用した。

35) *Ibid.*, I, 312.

36) *Ibid.*, I, 375.

37) 『モンテーニュ II』、第2巻・第12章、p. 601。

38) 同書、第2巻・第1章、p. 337。

Résumé

Le discours amoureux est-il plus maladif que le discours des malades ?

UENISHI Taeko

Des malades et des amoureux hébétés font des discours enthousiasmés sans vraiment vouloir arriver au point où ils se voient dévoilés. Car il s'agit d'une recherche du <moi qui s'énonce> qui sait mourir tout en vivant <tout> dont il meurt.

Leur sujet tourne autour de <tel que je suis>. Est-ce fruit de la causalité de laquelle est bloquée la déviation ? Un discours qui y acquiesce pourrait être un mélodrame héroïque suggérant la fatalité ou des bassesses d'un quotidien raisonnable, donc d'un raisonnement quotidien.

Et leurs discours vont au-delà de la fatigue mortelle ; navigateurs sans boussole, dialoguant avec <moi> malade et amoureux de sa vie, <moi> qui a vécu et vit des fragments de sa vie rangés en causalité décousue qui ne font pourtant qu'un.